

## 『竹取物語』登場人物「性格論」第二稿

— 帝・かぐや姫・翁を中心に —

井上英明\*

かぐや姫の性格の内容について、この物語の語り手は、カタストロフイ寸前まで直写を避けている。稿者はすでに本紀要掲載の旧稿<sup>(1)</sup>で述べたように、以下、帝やかぐや姫や翁の「性格」を、あえて原文に素直に語らせてみたい。

この物語の初めにおいては、かぐや姫の「かたちのけそうなること」(美貌)ばかりが強調され、それが「世界のをのこ、あてなるもいやしきも」から、「色好といはるゝかぎり五人」の貴公子の求婚譚を引きおこすための直接原因となるプロットを、一層効果あらしめていることは言うまでもない。この五人の男たちの演じる五つの話柄は、かつて柳田国男の言う、流動可変のいわば説話の「自由区域」<sup>(2)</sup>であったのかもしれないが、この物語を緊密なプロットをもつ、一回的に成った物語文学作品としてみるかぎり、改変自由な箇所などといって、ただちに柳田説に賛同するわけにはいかない。この五つの話柄は後の物語(『大和物語』

などの歌物語を含めて)、特に『源氏物語』の巻序にみられるように、すでに豎・横の並びを先取りし、全体として実に整然たる葛藤式の複式構想によって書かれているのが、その主な理由の一つだからである。

この物語の段序の分け方は、田中大秀の撰にかかる『竹取翁物語解』(巻首文政九年、一八六、十一月)五巻の仕立てが、これを読み進む読者にスリルとサスペンスを与える意味で、すぐれているので、以来、これに従うテクストが多い。すなわち、巻首の「物語ぶみをよむ意ばへ」・「書の名」・「つくれる時代」・「作ぬし」・「據りどころ」さらに「附録」として近時、堀内秀晃氏「岩波版新日本古典文学大系『竹取物語』」に再録されたように、「竹ノ中に人を得たる」・「物の変化して人になれる」・「妻あらそひ」・「佛の御石鉢」・「龍の首の珠」・「南海」・「男せざりし人」・「月のみやこ」・「天の羽衣」・「天に升れる」・「今昔物語に載せたる此物語并諸書の異説」・「不老の薬」といった項目は、説話の類型学・神話学、さらには地理学・天文学・医学等と、学際的領域を拓く予感にみちている。その出典・書承関係を中心とする文献学は、天竺・唐土の故事、本朝における先行作品の博搜によって、契沖の『河社』をはるかに凌ぎ、現代欧米神話学・説話学の成果たるタイプ・インデックス、モチーフ・インデックスの先蹤として、国際的な学説史の評価に値するものであると言ってよい。

この物語を右のように、大秀の研究の方向を押しすすめるとなると、作者の伝典・漢籍・『記』・『紀』・『万葉集』・『風土記』その他にわたる博識と、そこから必然的に予想される作品の底の深さを思い知らされ、いきおい、この作品の登場人物に対する、古樸ながら近代的・写実的な性格描写を見逃してしまうことになる。

かさねて旧稿で指摘したように、五人の貴公子のキャラクターの描写

は、細密描写とは対極にあり、行間を読むことによって見事である。男たちの最後に登場するのは、一天万乗の帝王であった。しかし、これを目して皇権の衰退した時代化粧だとする説明もあるが、いかにも説得力が弱い。帝王が恋愛において敗者となり、后がね、伊勢齋宮をあやまつ『伊勢物語』の「昔男」から『源氏物語』のスーパー・スター光源氏への道のりは、情念のひとしおの乱れ、美的虚無をはらんだ日本人特有のみやびを主軸とする、王朝物語文学の自律性、自己運動とみななければならぬのではなからうか。

『竹取物語』の帝もまた、かぐや姫に対して振られ役を演じたこと自体、脱聖化の一つであり、男女の恋の伝統の中にあるが、さらに帝を現身の「をとこ」として描いたところに、この物語の作者の宮廷官人などには到底なしえない、旧辞文芸を克服した前衛性があるとまで言っているかと思う。

作中、帝が内侍中臣房子に命じた「多くの人の身をいたづらになして婚はざるかぐや姫は、いかばかりの女ぞ、と、まかりて、見てまいれ」ということばは、かぐや姫への「妻争い」の枠組で、先きの「色好みといはるゝ五人」の男たちとは、その劣情において変わるところはないにしても、姫から難題を課せられる愚弄の対象ではない。勅使、内侍中臣のふさ子とかぐや姫の対話は、かぐや姫の命名者が「齋部の秋田」で齋部氏、「中臣房子」の中臣氏が藤原氏であることによって、両者の氏族としての対立は明らかである。しかも、かぐや姫は大秀の『解』以来の指摘のごとく、『古事記』垂仁天皇条にみえる大筒木垂根王の女「迦具夜売命」に由来し、このカクヤヒメの叔父が「讃岐垂王」である。竹取の翁の姓「さるきのみやつこまろ」の「さるき」が「さぬき」の音転であるとすれば、『延喜式』大和国広瀬郡の讃岐神社と同郡の散吉郷と同

根とみて、竹取の翁を大和国広瀬郡に住む讃岐氏の一族と見立てる論考も民俗学者にある。そうすると、竹取の翁、かぐや姫親子は大和旧族のグループで、齋部氏も新興の藤原氏の前に衰微する旧氏族である。こうした旧勢力と藤原氏の先祖中臣氏のふさ子との対立関係において、ふさ子を勅使として送った帝側の不首尾は、はじめから予想されていたという考え方も成り立つ。しかし、こうした姓氏からの連想で、この物語の登場人物の性格を解くのは、これまた説得力に欠ける。齋部氏からの連想で、広成の『古語拾遺』(大同二)の延長上に『竹取物語』を置くには、この物語の登場人物は帝にしても、翁にしても、かぐや姫にしても、あまりにも人間的である。民俗学の集団芸術的シャーマニズムはこうした人物の深層に、ある種の下意識的なひろがりを用意させるかもしれないが、こうした登場人物たちは、テキストの中で十分に近代的人格描写に堪えうるほど自在である。

さて、勅使中臣のふさ子は帝の命を承け、かぐや姫の邸に入る。ふさ子の取り継ぎ役は、この物語で殆んど出て来ない(そう)姫の方である。しかも、このあたりのやりとりはつぎのようである。

かぐや姫に、

「はや、かの御使に対面し給へ」

と言へば、

「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」

と言へば、

「うたてもの給ふかな。御門の御使をば、いかでかおろかにせむ」

と言へば、かぐや姫の答ふるやう、

「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」

内臣房子は律令制国家制度にあって、天皇に近侍する内侍司の三等官である。この勅使に対して、かぐや姫の返答は完全拒否であり、后妃として入内の拒絶である。宮廷祭祀をめぐって、藤原氏と齋部氏の対立などの次元を超えて、帝を俗、おのれを聖とする二元論の対立である。さらに、このような俗なるものの最高位たる「国王の仰ごとを、まさに世に住み給はん人の、うけたまはり給はで有なむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、勅命を迫る内侍に対して、かぐや姫は、「国王の仰せごとを背かば、はや殺し給ひてよか」と、死をもっての抵抗である。帝は一時、思い諦めるが、あとは世俗の他の男たちの狂恋と何らかわるところのない戦略で、かぐや姫を得ようとする。かぐや姫に対して、「この女のたばかりにや負けむ」と思って、今度はくどきの仲介の標的を父親の翁にむける。娘をくれるなら、翁に「かうぶ爵」を、すなわち五位に叙爵して殿上人にとりたてる、というのである。竹取りのなりわいの翁にしては、望むべくもない夢の又夢である。翁が「官爵」と娘の「御命のあやうさ」を避けるといった二者択一に迫られ、猶、後者をもってかさねて帝に哀訴する姿はやはり、世の常の親心とすこしも変らない。帝の心理も逃げられれば追いたくなる、これまた世の常の男たちと何ら変わるところがない。そこで、帝はかぐや姫にみずから逢って、求婚しようとする。「御狩の御幸」の段である。文脈に沿って読むと、帝が「猶もいておはしまさなん」と御輿を寄せるのだが、かぐや姫は「きと影になりぬ」と、姿を消してしまう。帝は姫を「変化のもの」、異界の者とせず、あくまでも現身の女性として「げに、たゞ人にはあらざりけり」と思い、「さ

がたいことを悟らざるをえない。せめて姫の姿だけでも見せてくれた翁を、「よろこび給」うのである。つまり、翁に官位と禄を賜わることになる。姫との別れぎわに詠んだ「帰るさの行幸物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆへ」の御製には、帝が姫を残して後髪をひかれる思いの中に、勅命に背いてとどまる姫への、かすかな怨情がひびきあっている。かぐや姫も先きの五人の貴公子への返歌とは、趣きががらりと変わって、「葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の台をも見む」と応え、現世の男たちへの拒絶を貫くにしても、これはすでに帝の心情に感情移入した生身の女の歌である。宮廷に帰って、なお姫への恋情を絶つことのできない帝の明け暮れの描写は、すでに、これ又大秀の『解』が指摘したように、師の宣長の「もののははれ」論をそのまま受け継いだものであると言ってよい。すなわち、

かぐや姫のみ御心にかゝりて、たゞ独り住みし給たまふ。よしなし御方かたにも渡り給はず、かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給たまふ。御返り、さすがに憎からず、聞こえかはし給て、おもしろく、木草につけても御歌よみて遣はず。

恋する女を喪った後の帝の心境は、何となく鐘愛の紫の上卒後の光源氏の「絶て御方々にも渡り給はず……御独寝になりて」(『源氏物語』「幻」)に通うものであり、さらには『源氏物語』の巻頭で、更衣を喪った桐壺帝の悲愴の雰囲気を先き取りするものがある。そこにはかつての恋の狂態を演じて、かぐや姫の愚弄の対象となった、あの五人の貴公子の醜態は、すっかり消えてなくなり、物語はこの六人目の求婚者の帝の登場に至ってはじめて、この月女は女性としての本能に目醒め、その神

聖が、はげしく揺さぶられることになる。かつての石上麻呂への返歌は単純にお人好しの男に対する憐愍に過ぎなかった。他の四人は頭から相手にされていない。

かくして、帝とかぐや姫の交情において、「ものあはれ」という純粹感情は、初めて人格化される。もし、それが作中人物の「性格描写」の文学的価値だとするならば、そしてさらに、『竹取物語』が「物語の出で来はじめの祖」としての条件のキー・ワードだとするならば、この物語の説話的古樸な語り口と、初めと終局の超現実的な筋立の外面に読者は欺かれてはならないだろう。

稿者はこのエッセイの冒頭に、かぐや姫の性格描写が物語のカタストロフィに至るまで隠されているといったが、かぐや姫は竹取の翁夫婦がその貧しいなりわいの晩年に、初めて竹の中に得た女子で、それは黄金そのものではなく、翁の竹林における継続的な労働によって、黄金をもたらし異界からの女子であった。翁の台詞に、「我子の仏、変化の人」とあるように、この女子は長ずるに及んで、かつて稿者が推定した十五歳の頃、<sup>(3)</sup>妻争いの始まる頃には、その年齢にふさわしい一般の女子のもつ感傷的、浪漫的な、夢と現実を混同する性格とは裏腹に、理知と傲岸を兼ねそえた女に、すでに成長してしまっている。近代文学的性格批評で言えば、中村真一郎氏の評に言う、「凍った心の奥底に不思議に虚無的な人生観が完成されていった<sup>(4)</sup>」のである。このような極端な言い方をすれば、この物語の語り手は、帝も含めて六人の男たちに、それぞれの男性の女に対する欲望からくる性格を代表させ、この虚無的な女性——虚無的であるが故に何もかも生み出さない——「美」そのものと化した女主人公と対決させたことになる。したがって、かぐや姫が貴賤を問わず、「世界のをのこ」の渴仰崇拜の的となるためには、その外貌の美し

さのみが強調されるべきで、その性格の人間的な弱点——愛することは敗北すること——に描写の委曲を尽すことは、巧妙に避けられていたわけである。

かぐや姫の性格が一度にその素顔をあらわにするのは、帝の求婚と月命に依じて地上を去っていく場面である。姫は父親としての翁の愚かな愛情、帝とのしめやかな不逢恋といった人間的な感情の世界に引き戻され、そこにおいて、本来の天人としての自己の生い立ちと、人間世界での可婚期の女としての矛盾に、はじめて苦悶する。この苦悶が極限に達したとき、姫は初めて自分の心の秘密を告白しなければならぬ。そのことは、とりもなおさず、姫の地上における運命の終焉を意味する。姫は早くも妻争いの相手になる頃、自分の地上における人生のプロローグとエピローグを同時に察知する理知を授けられていたが故に、理知そのものの不幸を知らなければならぬ。すなわち、現世の一切は虚無であること——富も、恋も、権力も——を強く感じた女性として描かれている。いずれは月の都に帰らなければならぬ運命が、姫に生身の女性からみれば透徹した理性を賦与し、しかもそれがこの世の貴顕の男たちとの結婚に、いささかの関心をも持たしめなかったという筋立となる。

もともと結婚拒否の実例は、大秀の『考』に「男せざりし人」として挙げられた「八坂入彦皇子之女」、弟媛がある。「容姿端正<sup>カホキョウテイ</sup>」のため景行天皇の求愛をうけ、皇命の威にたえず、一度は召されるが、姉君の入媛に譲って二度と結婚しない例があり、姉妹を違えて『源氏物語』の宇治八宮の娘たちに通じるところがないでもないが、これは単に自分の「形姿穢陋<sup>カホキョウテイ</sup>」を恥じ、「久しく掖庭に陪<sup>つか</sup>へるまつるに堪へじ」として、「容姿麗美」の姉君の八坂入媛に譲ったに過ぎない。(『紀』巻七)。さらに清和天皇貞観元年八月十日条の尚侍従三位当麻真人浦虫(『三代實錄』第

(三)や『大和物語』百三十八段の伝える「故御息所の御姉おはい子」も、さしたる理由もなく一生、「いなび妻」として生を終えたに過ぎない。男女の性愛の自由な時代に、こうした例はめずらしかつたから、わずかに記録に残ったのであろう。

かぐや姫の性格造型はこうした男ぎらいの女としてではない。物語の語り手は、あくまで女性としての感情を偽って、理知の仮面をかぶりつづけさせ、刻一刻と迫り来る自己の運命に怯え、月に向って歎き悲しまなければならぬところまで、姫を追いつめていく語り方である。姫が現世での「学習」によって身につけた人間的愛情と天上的思想との二元論から抜け出るには、月の都に帰ること、すなわち地上を去ることであった。姫の地上での生活は養父の翁に、「そこらの黄金給て、身をかへたるごと」にしたこと、それは天上で犯した姫の罪のつぐないなのだ、という風になっている。天上から降されたかぐや姫の地上での経験は、貴種の流離における試練には違いないが、流離の地を離れることは、天に昇ることであり、現世における死を意味する。月の都の宮殿のありさまは、かさねて『考』の引く仏典、『起世経』や『龍城録』の描写のごとく、天子の寿命は五百歳、宮殿は目も奪わんばかりの壮麗そのものとして描かれ、ここに入ることは、現身の人の素懐を遂げることではある。が、『竹取物語』の大団円における月よりの使者は、翁の強い愛情、帝の権力と恋をも、すべて世俗のものと同様に蹂躪して、悠々と姫を奪い去る死の象徴である。別離はただちに死を意味する。語り手はこうした絶対の時を前にして、地上の人間のむなししい抵抗のありさまを、勅使高野大國の率いる「六衛の司あはせて二千人」からなる警備に描き、天人に対して不可抗力の真実をつぎのように語る。すなわち、天人を前に、「物におそはるゝやうにて、会ひ戦はん心もなかりけり。からうじて思ひ起こ

して、弓矢をとりたてんとすれども、手に力もなくなりて、萎えかゝりたり。中に、心さかしき者、念じて射んとすれども、ほかさまへ行きければ、荒れも戦はで、心地たゞ痴れに痴れて、まもりあへり」という状況である。訥々たる語り口であるがゆえに、読む人の目に、聴く人の耳に、却って活き活きと迫ってくる。徹底した現世無力感である。

かぐや姫は地上を去ろうとする瞬間まで、すなわち、人間の感情を忘れさせる天の羽衣を着るまで、現身の女である。天の羽衣を着て、「飛ぶ車」に乗る寸前に、「心まとひて泣き伏せる」翁、「具してはおはせね」と、泣き伏す翁に、姫は「心まどひぬ」状況となり、ここにはじめて理知の仮面をぬぎ捨て、泣きながら書く遺書は二通ある。一通は養父の翁、もう一通は帝に対してである。この二通の遺書の一つは、父との別離の悲嘆、もう一通は逢わぬ恋に終った帝への訣別の書である。おそらくこの遺書は、あの五人の貴公子中の一人、阿部御主人が唐商人王慶に与えた書簡とともに、日本語散文発達史上、最初の遺言の文体として、価値あるものと思われるので、全文を左に引いておく。翁に対しては、

此国に生まれぬるとならば、嘆かせたてまつらぬほどまで侍らで、  
すぎ別ぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ。ぬぎをく衣を、形見  
と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨てたてまつり  
て、まかる空よりも、落ちぬべき心地する

帝には、

かく、あまたの人の賜ひて、とどめさせ給へど、ゆるさぬ迎へまう  
できて、とりいでてまかりぬれば、口をしくなしき事。宮仕へつ

かうまつらざるぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心えずおぼしめされつらめども、心強く、うけたまはらずなりにし事、なめげなる物におぼしとゞめられぬらん、心にとゞまり侍りぬる。

とて、

今はとて天の羽衣(あま)きる(は)おりぞ君をあはれと思ひいでける

前者のゴチックで際立たせた二つの語が、おそらくキーワードとなる。「すぎ別れぬる事」が「本意なくこそ」であれば、それは「宿世」ということになる。かぐや姫の月への帰還は、「本意」と「宿世」の葛藤の中で自覚として捉えられている。もはや、「妻あらしい」の話型のみを「自由領域」などとして、改変できない消息であって、ここに来て『竹取物語』の世界は、物語文学としてのかぐや姫の一代記となっている。

帝への遺書にみられるキー・ワードは、地上から月への昇天に「まかる」という動詞を使ったことである。これは翁への遺書にも「まかる」とある。翁と帝に対しての対象尊敬表現だと、簡単に読み過ぎしてはならないだろう。ここではあきらかに、地上より月の都の方が下位にある。翁と帝の現世無力感に対して、かぐや姫の別離の愁嘆がつのればつものほど、月の都はあきらかに不毛の地である。帝への遺書の終わりの一首、「天の羽衣をきるおりぞ」の「ぞ」という時の強調形において、君への「あはれ」は、つもののである。かぐや姫はこの後に、不死の薬の入った壺を形見として添えおき、永遠の思慕を告白するが、天の羽衣を着せられたとたん、現世への執着は断ち切られてしまう。この筋立が世界的に白鳥処女型とか、和風では鶴女房型とかいった、話型的枠組を

越えて、そこには女性の、衣裳による魔術的変心を垣間見できるような気がする。かぐや姫は宿世として天上的思想を貫くが、土壇場になって翁と帝、すなわち、自分に真実の愛情を捧げてくれた者には、嘘偽りのない愛措の念で応えている。かぐや姫をそのような心境に置かしたものは、偽り多い人の世にも、善意と好意にみちた愛情の強さといった、地上の人間の真実にたいする語り手の美しい信仰であろうと思ふ他ない。そのことがまた、私度僧たちの陰惨で鬱屈をこめた因果応報の筋立で語られた、一時代前の『日本霊異記』などは撰を異にする、この物語の作者の余裕綽々たる、ふてぶてしい諦観による創作意図を予想することができそうな気がする。さらに、われわれはかぐや姫とこれを争う現世の男たちの失敗譚の中に、作者の高度に知的で、したたかな人生観を垣間見できるであろう。永遠の女性の正体も知らず、ひたすら、「得てしかな、見てしかな」と思って失敗した男たちへの笑いの中に、とらえようとして、とらえられない美の謎と深淵に取り憑かれた近代的作家ともいえそうな作者の、憧憬と呻吟さえ感得されそうな気がする。

つぎに、竹取りの翁の性格について、少しく述べておこう。一体に、この物語が古拙で説話風、童話的と評されてきたゆえんは、登場人物の性格があまりにも紋切型に押し出されていることである。非情で、虚無的なまでに冷めたいかぐや姫の性格を強く印象づけるためには、逆に翁の性格が現世的な愛執に感溺し、出世や名誉や富への欲望に昏迷するといった人間としての性情を、露骨に外に出すものとして描かれている。この物語の語り手は、異常なまでにそのことを念頭に置いて、翁を徹底的にかぐや姫の性格とは対立的に話を進めている。すなわち姫とは正反對に、早くも物語の初めにおいて、翁に支配的な性格をつぎのように語

る。五人の男たちの求婚に対して、

我子の仏、変化の人と申ながら、こころの大ききまでやしなひたてまつる心ざし、をろかならず。翁の申さん事は聞き給てむや。

翁、年七十にあまりぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、おとこは女に婚ふことをす、女は男に婚ふ事をす。そののちなむ、門ひろくもなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせん。

姫の拒否に遭って翁はさらにたたみかける。

変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむかぎりは、かうてもいまいかりなむかし……

姫の再度の拒否に遭い、翁は懸命になってかきくどく。娘が権門と婚することによって、一族の再興と繁栄を切願する『源氏物語』の明石入道の原型ともいえる。しかし、この翁の態度を父性愛だとする月並みな評語がある。父性愛は母性愛と並び、道徳律として普遍的に評価できる徳目である。しかし、翁の台詞を注意深く読むと、第一に養育の恩をかぐや姫に被せること急である。ここには姫が実の父親ではなく、偶然に竹林で見つけて育てた養女——異界から富を運ぶもの——という意識が、潜在的にはたらいっているからだろう。第二に、自分の年齢を実際以上に偽わり、今日明日を知らぬ命だといって姫の同情を求める。旧稿において推定したごとく、翁がかぐや姫を発見したのは四十二歳頃、ここではその時から約二年後のことで、僅か四十四歳であるにもかかわらず、七

十余歳と偽り、現世の時間に従う翁でありながら、姫と同じ神話的時間に呑み込まれ、ふたたび現世に還って、「今日明日の命」と喚くのは、たとえ当時の男性が四十歳で「翁」の呼称を得たにしても、あくまで姫の関心をひきつけようとする大袈裟な表現である。さらに、自分が目の黒いうちならともかく、死んだらどうなるかと脅迫めいたことを言う。

第三に、男女の婚姻はこの世の定め、「男せざりし人」は社会の慣習に反すると迫るが、『三代實録』卷三、清和天皇貞観元年八月十日条、尚侍従三位当麻真人浦虫のこぼれ話にあるような、「仇儼之道」によって、「その後なむ、門もひろくなりはべる」と付け加えることを忘れない。翁は姫を権門の貴公子と婚わせて、富と名誉をかちえたい。まさに貧者致富譚で、この姫が千載一遇の夢だったからである。翁の父性愛には、こうした三つの意識が混在する。まず、第一の实の子ではないという潜在的な意識に、少し穿った憶測をすると、さらに別の一面が見てとれるような気がする。もっとも、『竹取物語』には父性愛だけがあって、なぜ竹取りの爺の姫がいるにもかかわらず、母性愛の方が皆無なのか。このことについて、ふたたび中村真一郎氏は、「此れは随分不思議な作者の手落ちのようであるが、此のような童話風の形式の小説に於いて、『親の愛』に於いて共通する二つの性格、此の小説に於いて全く同様の位置を占める二つの人物を並述することは、その操り芝居風の効果を弱めることになるので、翁によって『親の愛』を代表させ、その性格を集中強化したものとと思われる」と、説明するのであるが、この物語の語り手は、姫の方をまったく無視しているわけではない。無視するどころか、翁が姫を発見した時に、「妻の女にあづけてやしなわす」と断っている。翁は毎日山に竹を採りに行ったであろうから、かぐや姫の日常の大部分は、この養母と共に過されたはずである。さらに「火鼠の皮衣」のこの

ろでは、偽物とはいえ、あまりにも「うるはしき」皮衣を見て、「この度はかならず婚はむと女の心にも思ひをり」とあるから、姫が母親として娘の結婚に、関心の薄からぬことが知られる。

ところが、実際、この物語に登場する姫の位置はきわめて低い。しかも姫が言葉をおこなうのは、わずかに帝の言葉を伝えに来た勅使中臣のふさ子との対面以外には見当らない。ここは勅使が女性なので、女性同士の詰め開きということで、姫の登場となったのだが、そのやりとりは空々しく、冷やかである。

姫、「はや、かの御使に対面し給へ」。

姫、「よきかたちにもあらず、いかでか見ゆべき」。

姫、「うたてもの給ふかな。御門の御使をば、いかでかおろそかにせむ」。

姫、「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」。

といった調子で、娘の入内という一大事を前にしての母と娘の対話とは思われないほど、そっけない。語り手はこの後つづけて、かぐや姫の養母に対する態度を説明している。姫が「いと心はづかしげに、おろそかなるやう」なる態度をとり、それを姫が「心のままにも、え責めず」ということになったのは、母と娘、すなわち女と女との間には性愛的な吸引力が少なく、ほとんど、たがいに他者だからである。しかるに、これが翁の姫との対話の場面となると、がらりと趣きが違ってくる。そこには入内を勧める翁と、それを拒否する姫との間に、必死の愛情の交換がある。すなわち、宮仕えをして、翁に官爵がさがるようにしてから死ぬと言うかぐや姫に対して、翁はすかさず、「なし給そ。官爵も、わ

が子を見たてまつらでは、なにかはせむ。さはあるとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給べきやうやあるべき」と、言うのに対して、姫の「猶そら事かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ」と、死をもつての抵抗に、翁は「天下の事は、とありとも、かゝりとも、御命のあやふさこそ、大きな障り」と言って、ついに姫の入内拒絶を帝に知らせに行こうとするのである。こうした翁の姫に対する執着こそ、世に言う父性愛の最たるものであるが、同時に、この父と娘の間に存する無意識の母錯綜のいみじき昇華だと解してもよいであろう。

一体に、父性愛にせよ、母性愛にしろ、それらは広く賞賛されてきた親子間の美德であるにちがいない。しかし、ここでは無差別に押しつけがましく、相手の自我はそこに入る余地がない。こうした、いわば反射的結合が親子間の愛情の実体であるとすれば、翁も又、ここに来て父性愛などというものから脱して、かぐや姫を他の男たちと同じように、生ける永遠の女性として、はげしい思慕の念を燃やしていた男性の一人だったと言える。

竹取りの翁の第二の性格の特徴は、たとえば四十四歳くらいなのに、事の急なるに依じて、七十余りと大袈裟に言う虚言癖である。こうした大仰なクセは、物語を通して一再ならず現われる。この父親は情況が切迫すると、たちどころに心神悩乱、前後の見境いもなくなる。さらに、目先のことだけで、すぐに事を判断してしまふ、軽率で、感情の起伏のはげしい性格であり、かぐや姫とは正反対に出来上っている。もう一つ例を挙げると、かぐや姫が自分の不可避の運命を初めて翁に告白したとき、「こは、なでう事のためふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種たけなの大きさにおはせしを、わが丈立たけたちならぶまで養ひたてまつりたる我子を、何人か迎えきこえん。まさに許さむや」と言ひて、「われ

こそ死なぬ」である。自分の年齢は、まだ初老を少しこえたぐらいであるのに、七十余りと頽齡を装うし、今度は地の文に姫の身長が「三寸ばかり」の身長とあるのに、「菜種の大きさ」と極小化する。そして、姫の告白には、「われこそ死なぬ」と言いつて、「泣きののしる」し、又、帝の「御使」には「泣くく」申し上げるのである。さらに天人が降来することに對しては、「長き爪して、眼をつかみつぶさん。さが髪を取りて、かなぐり落さむ。さが尻をかき出をかき出でて、こゝらの朝廷人に見せて、恥を見せん」と野鄙卑賤のことばで激昂する。とても聖女の父親たるはおるか、后がねの岳父にもそぐわぬ。後の『うつほ物語』で、貴宮を争う男たちにも、こんなのはいない。姫のいよいよ昇天という瞬間は言わずもがなである。

いま一つ。目先のことだけで、すぐに事を判断してしまう性格は、主として、かぐや姫をめぐる五人の男たちの妻あらしい物語で、露骨にあらわれる。車持皇子が「徒らに身はなしつとも玉の枝を手おらでたゞに帰らざらまし」という、もっともらしい歌を持って帰って来たのを見るや、「この御子に申給ひし蓬萊の玉の枝を、ひとつの所あやまたず、持ておはしませり。なにをもちて、とかく申べき。旅の御姿ながら、わが御家へも寄り給はずして、おはしましたり。はや、この皇子に婚ひ仕ふまつり給へ」といった思慮の無さである。そして姫の言いつ分に聞く耳は持たず、花婿のためにささと「闇のうち、しつらひなどす」という性急さである。又、右大臣阿部のみむらじの持参した火鼠の皮を一眼見ただけで、真贋を見分けるどころか、すっかり信用してしまい、「世の中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをとと思ひ給ね。人ないたくわびさせ給たてまつらせ給そ」となると、もはや暴言脅迫である。すでに翁にとつての姫は、「とまれかくまれ」この大尺貴族と結婚さえしてもらえば

よいということになる。『万葉集』の老翁竹取の翁も、九人の女子の愚弄の対象であるが、この物語の翁も、間抜けで馬鹿正直な好々爺としか映らない。

この翁が、かぐや姫を得て「いきおひ猛の者」になったのだが、つぎに欲しいのは官位である。帝が「この女、もしたてまつりたるものならば、翁に爵を、などが賜はせざらん」と言いつて誘つたのに對して「翁、喜びて、家に帰りてかぐや姫に語らふ」ところに躍如としている。竹取りという賤業の身分に、官位こそは想像以上のものがあつたにちがいない。翁のこうした欲望が、かぐや姫の結婚問題に最後まで絡んだのである。すべての男たちの「心ざし、等しかんや」と言うかぐや姫の宣告は、実はこの物語で妻争いが始まるときに下されていた。翁も父親であるとはいへ、他の男たちと同次元に置かなければ、翁の父性愛と姫の男性観とのカラマワリという、この物語の意味深い主題は、活かされるべくもなかったと言えるのである。

『竹取物語』にはその他の登場人物として姓名をもつものは、齋部秋田、漢部内麿、小野房守、蔵麻呂、中臣ふさ子、高野大国、調の岩笠、仙女のほうかんむり…と、この物語の長さに比して、すこぶる実名が多いのが特色である。登場人物の実名をかかげ、作品を虚構化することにおいて、『伊勢物語』とは逆の方法である。また『竹取物語』の空間は帝都、筑紫の博多港、唐土、南海、そして月の都と広大である。「物語の出で来はじめ祖」たるにふさわしいゆえんである。

注

(1) 拙稿『竹取物語』登場人物「性格論」——五人の貴公子を中心に——(『明星大

学研究紀要』四、一九九六・三)

(2) 柳田國男『昔話と文学』(『柳田國男全集9』筑摩書房、一九九八)

(3) 拙稿『竹取物語』主題考(『明星大学研究紀要』二、一九九四、拙稿「物語の出て来はじめの祖」(後藤祥子他編『平安文学の想像力・論集平安文学5』勉誠出版、二〇〇〇)

(4) 中村真一郎『王朝の文学』(新潮文庫)(新潮社刊、昭和42)

(5) (3)の拙稿参看。

(6) (4)を参看。

付記、原文からの引用は、岩波版新日本古典文学大系『竹取物語』(堀内秀晃校注)に依る。